

自序

書肆から、「續支那の人々」を書かんかいふ徳憑があつた。恰度、夏休みの初め、何して銷夏暑さを忘れやうかと考へてる折、手紙を受けたので、早速筆持つことにした。

人は皆、數ある拙著の中、支那の人々が一番よくできると評せられるが讀み返へし見て、私としてはどうも満たされぬ感なきを得ぬ、おれは何となく皮相の支那觀たらざるを免れぬと思ふ、もう少し支那人を深く觀ねばならぬ。

その點を私はこの本で以て補なはふと欲した。だからといつて前著が支那觀入門であつて、この著は奥書である。とはいへまいが、幾らか支那の人々の内なる生活により深く觸れえなかつたかと思ふ。

こん度は隨筆で書くこととした。どうしても論文體では十分に支那人の心を描き現はしえぬと

思つたからである。隨筆といふものは、晋に議論ばかりでなく、體に趣味も、何れもかも落合つて渾然と一つにして文章と成し得るから、反つて論文體よりもよかないかと思つたのである。

例に依つて、書後には五十自述の一章を加へて、自分のことを書いて置いた。支那のことばかりでなく、崇實學園とその經營者のことも知つて頂き度いと思つて。この點讀者の誦とせられむことを祈り求む。

昭和十六年夏

著者識

目次

小品

圓滑	一
歸客	四
跪拜	九
天主、上帝、神	一四
朴	一七
俗の俗なる民	二二
忠孝	三三
三峽を溯る	六六
周山の治	三三
流水音	六六

目次

北京とところく	完
冬陶夏耕	壘
移り行く支那	壘
宣教師の貢獻	九
支那の建築	五
淨化	美
先覺と基督者	美
樺子木三十丈	壘
北京の秋	壘
日下無新	壘
夫妻	七
衣裳	壘
支那語	六

目次

佛 寺	九
槐 樹	九
民 謡	九
身 邊 の 人 々	
純 粋 の 人 間	一〇
狐 裘	一五
常 心	一五
悠 々 自 適 の 人 々	
謝 宅	一四
隱 逸	一五
胸 中 の 逸 氣	一六
柳 瘋 子	一七
筠 園	一七

二

三 國 志 正 義	一八
五 十 自 述	
柿	一八
初 戀	一四
隱 者 の あ け ぐ れ	一六
悟 空 の 旗 竿	一六

小 品

して獻敬するのは當然である。

さて、こういふ場面を見るに、支那人は決して父子、母兒相擁しない、肩に手をかけもせず、まるで他人行儀の如く、鞠躬として、會釋して、首と上身とを曲げるのみである。

二三日前に、何年か振りに、留學生の一人が東京から歸つて來た。姉や妹や徒妹達は皆、驛に至つて迎へたが、両親は門まで出てゐて、久しく逢はぬ我子を迎へた。汽車の着くのを驛で待つのと違つて、時間のはつきりせぬものであるから、半時間も一時間も、門の外に立つて、娘の歸へるのを今かくと待つてゐた。

それ位であるから、娘が着いたら多分相擁せぬまでも、手を肩にかけて迎へるであらうと思つたが、娘は首を曲げて上身を傾けるのみで母親は、たゞまあよく肥えてとか何とかいひつゝ、ポロ／＼涙を頬につたへ、父親は、黙つて微笑し乍ら迎へるのであ

つた。

多分杜甫が、耄村に着き、妻君を驚かした時も、詩には「感歎して亦獻敬す」とあるが先づこれの一寸深刻な情景位のところかと考へる。

今朝華北評論社から、一冊本が届けられたので讀み出したら、面白くて、つひ、しまひまで讀了して仕舞ふた。書中真空禪師のことが書いてあつた。今を去る六百餘年前雪村といふ僧が、十八にして支那に渡つた、元の頃とて罪なきに囚れたり成都に貶せられたり大層苦勞したことは、苦勞したが、年四十になり元主から寶覺真空禪師を贈られ、海山千里恙なく故國に歸へり第一に親を誼ねんとて相模についたが已に知る人もなくどこをどう探してよいものやら見當もつかなかつた、適々由比ヶ濱を通る時乗馬が何ものかに驚いて泥中に墜ち、衣服をぬらしてしまつたので、附近の茅屋に一老婆を訪ねて、暫くの休息を頼んだ。ところがその老婆が雪村を眺めて泣き出したの

どうしたのかと、やさしく問ふたら、「實は私に一人の子がいましたが皆早く空門に入つて、特に一子は遠く唐天竺に行つたさう、いつ歸るやら分りません。同じ年頃の和尚さんを見て、思はず泣けて來ましたのです」といふ。はつと思つてよく見れば夢寢にも忘れぬ母ではないか、「オソ母さん、私ですよ」とかけより、その暖かき懐ろに抱きつき、悲喜交々の感情にたゞ涙のみ、黙して顔と顔と見合はずのみ。

後年雪村は京都建仁寺の住職となり學徳の高い一代の名僧知識として善男善女の渴仰の標となつた由。

非常に面白い、數百年も前に成都に住みし日本僧があつたらうとは。

ところがその母子對面の光景を叙せし「その暖き懐ろに抱きつき」は、文筆の近代的な走りであつて、「黙して顔と顔と見合せ」の方が、本當に行はれし母子對面の所作ではなかつたかと思ふ。前者は西洋風、後者は東洋風の場景でありはすまいか。

西洋では長い間相見なかつた母子が相逢ふ場合は、それこそ相擁し、相抱きて、暫らく離れない、それはく大きい表情をせずばおかない。一體十里の歸客を迎へる場面を、演ずるに當つて東洋風俗と西洋風俗と、その何れを表情するのが、俳優として至難であらうか。

私は極めて僅かな動作たゞいそぐとせる落ちつかぬ表情、眼の表情、口もとの表情、それだけで以て、「妻孥我が在るを怪しみ、驚き定つて還つて涙を拭ふところを表現するのがずつと、至難であらうかと思ふが如何、何とならばそこには何ともえもいへぬ、内輪にして、深い東洋的なエキプレッションがあるのであるから。

跪 拜

周治十一年（一八七二年）の夏の末、初めて三十人の少年留學生が支那から、米國

へ遣られた、十年から十五年位勉強せしめる豫定だつた。ハートフォードに留學事務所を設け、陳蘭彬が留學生監督に任じられた。それから四年ばかりあいて陳は光緒二一年に公使に昇進して、吳惠善をして之に代らしめた。吳は官僚的で、任に就くと學生を公使館に集めて、訓示を興へた。ところが留學生は皆、たゞ會釋するのみで跪拜の禮を執るものはなかつた。

そこで「こゝろいふ學生は異國に來つて、本を忘れ、眼中師長も何もない、その學問が成就するとも、中國には用はなからう」と、いつて上奏し留學生を追い歸して了つた。

これが支那最初の遣米留學生の經過である。本文の記者は留米の經驗を有するものであるが、成程と思ひ當ることがある。米國では校庭で教師に逢つても、ハローといつて、目配せをすればそれでよい。それが總長であつても、同じである。學生が女性

である場合は、教授や總長が反つて脱帽してハローといつて呉れる。

そゝいふ國で、十四歳や十五歳の少年が三四年勉強したら、相當自由な人間になつて了ふに相違ない。多分、公使館で新任留學生監に謁見する時、ハロー位いつて握手を求めたんであらう。ありそふなことである。

この吳惠善の處置については、毀譽いろいろであつて、大體留學生達の方を罵るもの多くして譽めるものは少い。

しかし私は、反つて吳惠善は名にも似合はぬ短氣の行動に出でたものぞと思ふ。何とならば、それから少しく前（一八六六年）張之洞に選ばれて、歐洲に遣されし辜鴻銘は、留英十二年間、カライルやマシエアーノルドを讀み、所謂文法を學んで歸り *The Spirit of China People* を著はして、恰も今日の林語堂の如くに、當時雷名を世界に馳せたではないか。彼をしも「本を忘れた」といひ得るであらうか。

むかし辜鴻銘は支那を忘れるどころか狂ひぢみたる國粹論者となり、白人の連なる音樂會へでかい饅頭を携へ行き、しやぶり乍ら聽いて同座の毛唐人を驚かせたり、小脚の唄をかくを樂しんだり、種々の奇行を以て逸話を殘した。そして最後まで、辮髪を切らなかつた。否、支那中で最初に辮髪を切つた男であつた癖に、國中のものが切らされて了つた後、再び辮髪して死ぬるまで切らなかつた。

辜鴻銘の達者な頃、私はいりびたりに椿樹胡同の邸へ出入したが、或年、鶴見祐輔氏の東道して訪れし時、

「先生は歐洲で何を學ばれしか」

と問はれしとき、暫らく考へた後に、

「わしは文法を學びましたわいな」

と答へた。

彼は好んで、對聯を書いて呉れたが、その書は習つた字でないから、何人もまねのできぬ、ゆかしい文字だつた、習つた字でないといふ意味は、彼は幼少から外國で、横文字を學んだのであるから、私達の如くに、型にはまつた運筆を練習させられしとがなかつたらしい。筆をまるで白人が持つやうに握つて、力も何も入れずどしどし書きなぐつた。それ故に尋常一年生の書くやうな字ではあつたが、即ち書く文句が、人の意表に出てゐると、古拙な、彼の宋代の茶碗から來る感じと同じ、云ふにはれぬ趣ある筆蹟だつた。

第一回留米學生達は惜しいことをした。折角、遣つたのであつたから、ほつとけばよかつた。そうして十二年も勉強させたらその中から一人位は辜鴻銘が出たかも知れぬ。

る。女仙は十五卷ある。

仙とは山の人と書く。これと對蹠を爲す文字は俗、谷の人である。

世に支那人位、實利主義の民はあるまい、凡て皆是れ、谷の人である。蓋し最も俗
 ばいが故に、恐らく仙を想ふのであらう。

私の生國、近江は、近江商人の産地であつて、古來天井抜けの蚊帳を賣つて儲けた
 といふ評判である。

その近江から、古くは中江藤樹、近くは杉浦天臺道士が出てゐる。前者は近江聖人
 後者は長くも今上陛下に御進講申し上げたる人格、昭和の本傳である。

彼の懺悔士下座の奉仕者西田天香師もまた、生粹の近江の人である。明治から大正
 昭和にかけて教界空前絶後的献身の聖人は、蓋し澤山保羅先生であらうが、この人も
 近江の血を受けて居り、清廉清白比類なかりし乃木將軍もまた近江の佐々木源氏の子

孫である。

俗の俗なる近江人から、反つて日本國中に名をたたる、我を忘れて生くる人間が輩出
 するのである。それは恰も、支那人の中に、昔も今も、清福、清談の士の多きと理由
 同一であらうかと思ふ。

忠 孝

支那と日本とは、まるであべこべのこと多い、顔を拭ふに支那人は顔を動かし、日
 本人はタオルを動かす。林檎剥くのに、日本人はナイフを動かし、支那人は林檎その
 ものをまはす、支那では澤山一緒に買へば高價で、小買すれば割安である。日本では
 羽子板を持つて、手で羽をつくが、支那では羽子板なしで足で羽をつく、支那人は衣
 服の破れを上から膏藥ばりにつき、日本人は裏から自立たぬやにつくらふ。日本では

買手が幾らかと問ひ、支那では賣手が何ぼかと言ふ。日本人は挨拶に雨の降る降らんを問ひ、支那人は雨のことを訊くと怒る。

かくの如く、日支はあべこべであるが、この兩國國民の精神的距離は特に相離るゝと遠しで、兩國國民は同じ東亞に住み乍ら、別世界に住んでゐる。支那人は精練されてゐるが日本人は荒削り。支那人は圓熟せる紳士、日本人は圭角とれぬ野人、支那人は老獯、日本人は精悍、支那人は嘘をついてもよいから圓滑を期し、日本人は争ふてもよいから正直者たらんとし。彼は心理が複雑、これは單純、支那人は持續性を貴び、日本人は性甚だ急。日本人は氣魄で行き、支那人は執拗を以てねばる。日本人は潔癖にして支那人は包容性あり。彼は不潔嫌はず、これは清潔好き、こうも違つた二つの國民である。

似たもの夫婦を配偶者の選擇の原則とするならば、日支兩國國民は落第である。所謂、

全然合性ではないやうだ、彼は水の性、これは火の性である。

ところが世には往々、似たもの同志ではなく、互に足らざるを補ふところの夫妻もある。強情の男と、やさしい女。鬼瓦の如き逞ましい醜男と、お人形さんの様な美女。熱血男兒と冷性なる思慮深き女性、やり放しの快男兒の内助女房は尻ぬぐいしてあるくものと、昔からきまつてゐる。

それ故に、日支兩國國民を、彼此相補の夫婦とせば、満點である。

さて、如何に性格の合はぬ間柄でも、何か一つ二つ、相通するものがなくてはならない。鍋や釜にも耳がある。女中はこゝを掴むのである。戸にも上下二つの蝶つがひがあるではないか。日支兩國國民が共有し相通するものは、即ち忠孝の二字でありはせぬかと思ふ。

今日、支那人と雖も、忠と孝とは、實踐してゐる。昔漢の初め齊王に田横といふも

のがあつた。漢の劉邦が帝王に即くや、屬徒五百人と共に海に入り、島中に居る、劉邦は使を派して、其罪を赦し、之を召す。横その客二人と共に洛陽に至り、三十里にして洛陽に至らんとするの地に於て漢王に任ふるを恥ぢて自頸す、客をして其頸を奉じ漢王に奏せしむ、帝王卒二千人を發して王者の禮を以て葬らしむ、既に葬りて二客其の墓の傍に孔を穿ち自頸して之に拘ず、漢王聞いて島中に五百人ありと聞き之を召さしむ、至れば田横の死を聞きて亦自殺す、(東洋史辭典より)またそれ程昔でなく、近く宋代での文天祥は忠肝鐵石の如き人であつた。彼は元に囚へられて、大都北京に送られて來た。途中食はざること八日死せずして復食ふた。燕館に到れば天祥寢す坐して朝に及んだ。時に元の世祖人才を南方に求めしめた。王績翁曰ふ「南人天祥に如く者なし」と、天祥素より従はず、北京に在ること三年、世祖その志の屬せざるを見て、「汝何を願ふか」と問ふ、天祥「一死賜れ」刑に臨んで、見物の衆に問ふて曰く

南方は何れかと恭しく拜して死んで逝つた。

文天祥程ではなくつても、小天祥、類似天祥、淮天祥、それからまた似而非天祥など求むれば、今日の支那と雖も、或は少くはなからう。事變以來、私共は日本の兵隊さんが、天皇陛下萬歳を唱して、從容死に就くといふ話と、支那捕虜が、何を問ふても殺して呉れと叫んで止まぬもの往々あるを聞いてゐる。

また一姓に仕へて、志を更へざるものに至つては、そこらそんじよにザラに居る、警察署長が首になる。彼に用ひられし部下は皆、辭して去る。掌櫃が免職になる。我も不幹了いふて、さつと辭めて出て行く。

たゞ憐れむべきは、支那人は上に、永遠の聖天子を頂いてゐぬことである。それ故に思ひくに、自分を用ひて拔んで呉れし先輩なり、上長に盡忠するのみである。しかもその忠誠の氣堅いこと驚くべきものがある。

孝順もまた、やゝ形式的ではあるが、日本人も到底及ばざる程に實踐されて居る。私は日支兩民族は、この忠孝の二字を以て、相共鳴相携へ、直に理解すべきではないかと思ふ。従つて忠孝の道を破らしめることによりて、たとへ一人の支那人と雖も我國の味方とすべきではなからう。

三 峽 を 溯 る

僕は今英船新昌和に乗つて宜昌峽を過ぎ、西陵峽を溯りつゝある。僕は生れて四十五年會つてこの様に美しき天然を見た事がない。遠に自居易や李太白の如き詩聖が來遊して飽かず眺め詠んだだけある。全く詠まんが爲めにはこれだけの美しき天然がなければならなかつたのであらう。美しき詩とは要するに美しき自然の描寫であり實感でしかないのであらう。百丈もあらうと思はれる様な絶壁の巖に苔がみつちりと蒸し

てゐる。峽と峽とが重りあひ、行手は道なきまでに狭くなれるが、やがて船の進むにつれて狭れる峽谷が自ら開いて行く。楓であるか、紅葉して松や杉の緑の中に燃えてゐる。猿聲を聞いたといふ詩人の如くに今はエテ公に迎へてはもらへぬが、然し雁行は天際に没し行きて、峽谷は一面の秋をあらはしてゐる。峽谷のあひ間には白い支那の家屋が點々としてゐる。

この交通の不便な所にかゝる美しい庵を結んでゐる人々の心地に僕は詩趣を感じる。僕も六十位になつたら、この峽の岩角にある様な白壁の支那家屋（日本の土藏のやうである）の中にこの世のいざこざを忘れて暮らしたいと思ふ。

太陽が峽谷にあたつて、あちこちに濃淡の陰影ををさげるもまたなく美しい。屹立せる兩岸は赤壁のやうに赤き岩の崖もあれば、白い石灰岩の斷崖もある。さうした赤白の斷崖の半ば青い苔につつまれて目が醒める様な色に映えてゐる。それに大空は丸

説かんには、耕さずと雖、飢を食ひ、織らざるも寒に衣す。功は耕織よりも賢れりと如何といつたとある。

私はこの墨翟と吳慮とを比べて、兩者何れにも敬意を拂ふのである。黙々として冬は陶し、夏は耕して眞黒になつてゐる吳慮も、また聲より上げて天下を遊説し黙ろむと謂はれし墨翟も、共にこれ、相譲らざる何れを聰とし何れを愚かと許せんにも、優劣なきには非らざるかと信ずる。必らずしも吳慮を冷々淡々の人といふをえぬ。反つて寧ろ情熱は墨翟の如く、日々外に逸散することなき故に鬱結するであらうからより常に燃え立つて居るやも知れぬ。

「イエス、口をひらき教へて言ひたまふ（マタイ傳五ノ二）」とある。私は彼の私生涯は口を駢して教へしものであると思ふ、口をひらき始めてからは、あの通りに、實に達觀せる人生觀を有し、徹底せる律法觀を有し、人生の奧義を悟得して居らるゝが、

あの思想あの見識は無論、木匠時代にも、已に有つたので、ヨハネが囚れると、その刹那に獲得しえしものでも何でもなかつた筈である、そうして見ると、あれだけの宗教と哲學と、道徳を體得し乍ら、一木匠として黙々就働し給ふ、その私生涯に私は、最も大なる敬意を表し度く思ふのである。

移り行く支那

去年の支那必らずしも今年の支那に同じからず、今日の支那また明日の支那と同じではない。相當のランボで以て、移りつゝある。

私がこの國に来た頃、飲氷室文集といふ本があるので、この支那の人々は、氷を飲まない氷どころか凉水も飲まぬといふに、どうし飲氷室文集と名づけるのであらう。不思議に思つた。

飲氷室文集といふのは、梁啓超の書いた文章を集めたものである。

然るにこの頃、よく飲氷室といふ店を見だす、南京にも北京にもある、そしてその店では氷棍だの鮑氷を賣つてゐる。鮑氷で何だらうと思つたら日本人のよく食ふみぞれだの、イチゴだの、あづきだのいふ削り氷のことであつた。兎に角近來盛んに支那人が氷を食ふやうになつた。

相當文化を持つてゐる民族で、日本人位下脚を露出することの平氣なものはあるまいが、支那人は之に反して、足を決して人に見せない。これは實によく聞かされた支那談である。

然るに近來、特に支那の女性達は、下脚をあらはして、平氣であるのみか、襪も用ひないで、指の見える靴を穿いて居る。

それが爲めに、支那の女性の足がめつさり大きくなつた、金運歩々として行く女性

は皆霜髮の老女ばかりだ。反つて今日では朝鮮の婦人が、絹の彩つた幅の狭い羅馬の船の舳のやうに、上へそつた瓜の種のやうに小さい靴を穿いて歩けるを、北海公園などで見て、支那情調を味ふことができる。むかしの支那の弓鞋つてあんなものであつたらうかと。

宣教師の貢獻

白人の宣教師が支那に來てゐることは、支那にとつて、長い間非常なオブリゲーションだつた。若しも彼等の一人でも二人でも、匪賊にでも殺されやうものなら、何萬圓といふ賠償金を拂はねばならぬ、それ故に宣教師の居るところには、特別の護衛を設けて、警備したものである。

「廢禁けたり、子朝より退いて曰く、人を傷けたる乎と、馬を問はざりき、今日地方

鬼に角北京の秋は粟から始まつて、それから栗である。糖焼栗子は何といつてもうまい。何でもかんでも、支那人の食ふものは皆日本人も食へるとは限らない。日本人の口に合ふものもあり合はないものもある。糖焼栗子は来たばかりの日本人の口にも合ふ。それに目をつけたのが、甘栗太郎の今は已に亡き先代の北澤氏であつた。當時北澤氏の令妹米子さんは目白を出て、支那人の文筆家に嫁してゐられた。それが縁故でよく北京へ遊びに来られたが、

「支那の栗はうまいね、そして安いね、この皮がてかく光つてるのは何故だらう。砂糖を砂に混へ砂を焼いて栗をやほらかくするのだと、そうすると、糖分が栗に沁み入るつてか」

米子さんの旦那さんと語つてゐられたことを、つひ昨日の如く私は覚えてゐるが、甘栗太郎はそういふヒントから發足したものであつた。

北京の秋は、とても豊富で梨子もあれば、桃もあるが、たゞ一つ遺憾なのは、柿である。私は柿は凡ての果物の王であると思つてゐる。臺灣のマンゴ、布哇のペア、加洲の瓜何れもうまいことは旨いが、少くとも私には、日本の御所柿、お寺柿には遙かに及ばぬ。ところがその柿が、支那にはない。否あるもあるうんとことさであるのであるが、甘くない。この國の人々は滋味のある柿を好むから、自然日本の御所柿やお寺柿の如さが、發達しないらしい。

秋の北京は何といつても、月餅がおいしく頂けるから嬉しい。名月が圓ろくなる頃賣り出される。日本のお菓子如く、一色の甘さではない。油の入れるものもあれば香の高いのもあり、實においしい。

お料理も、秋に限るやうだ。シーズンは先づ荷葉粥、荷葉肉から始まる。それ等は蓮の香高いお粥、蓮の葉に巻けるお肉である。何ともえ言へぬ淡い香りがする。香を

物ではない。

支那は五千年六千年の文明を有する老大国である。従つて鄙に至るまで、男女共によい骨格してゐる。目、鼻、口皆よく揃つてゐる。その點日本の田舎者の山だしの顔とは大に違ふ。

それであるから、私の如き顔してゐるのは、支那には極めて少い、少いといふよりか殆んどないといふ方が正しい。

組合教會の先輩は、私を選んで支那に派遣するときに、私の顔を見て、挨拶した形跡がないではない。

渡瀬氏、荒川君など、よい志願者があつたのにも拘らず、宮川先生等は私を適任者と做し給ふた、その理由は私がこつゝ顔してゐるので、滿洲の如き土匪跋扈の地には

最もよからうと考へられたらしい。

當時私の同僚、友人達は皆、擧つて私の滿洲支那行きを適材適處なりと稱した。そしてその理由は何れも、私が如何にも蠻的で、如何にも粗暴であるかの如くに、私の顔を見て感したらしかつた。

然るに支那人は皆、文化人であつて、張作霖の如きですら、白面の最もやさしい男だつたし、馬占山の如きも枯れくした仙骨颯然たる風貌である、そういふ文化人の支那人民の中へ遣すに、四十萬年もの前にこの國に住み居りし類猿人そつくりの私を送り、そして北京の聖者として、この國の人々の尊崇の的とせしめやうといふのであるから、それは、ちつと無理な注文でありはすまいか。

何ぞ支那へ遣る日本最初の宣教師を、例へば原田助、長田時行といつたやうな見るからにゼントルマンをよこさなかつたのであらう。